みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

災害過程の研究と被災地支援：コメント2

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高桑, 史子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001393

コメント2

高桑　史子
首都大学東京　都市教養学部

本日のお話を聞かせていただいて，私はスリランカの南岸の漁民を研究している一文化人類学者という立場でコメントを言わせていただきます。

今回の「津波」というのは，研究者自身も全く考えてなかったわけで，現地の人ももちろんさることながら，研究者自身も，これからどうやって研究していこうかという状態にあると思います。また，林さんのように，これまで防災あるいは災害を実際に研究テーマにしていたわけでもなく，さらにとりたてて支援活動にもかかわってこなかったということで，どうやってこれから研究を組み立てていかなければいけないんだろうか途方に暮れている状態かもしれません。これまでの研究といえば，変化について考えていく場合，例えば，漁村の開発であるとか，機械化であるとか，あるいは漁業協同組合の組織化というようなことに視点をあてて研究してきたわけですけれども，ここに新たに「津波」や，あるいは「災害復興」など新たな問題が起こってきて，これらの要素を研究の中にどのように組み込んでいくかという問題が出てきていると思うんです。

1　災害復旧・復興関係者の立場
―スリランカとインドネシアに見る「災害」と「政治」のかかわり―

幾つか気がついたことを，まとまりがないですけれども，私なりに指摘させていただきます。今，渡辺さんが言われたように，アチェとスリランカのデータの相違が非常に際立っていると思うんです。アチェは余りにも美しすぎるという印象を持ちます。それは，一つは，これまで長い間紛争に苦しんできたアチェの人たちが，とりあえず去年，津波を契機というか，これまでの紛争そのものに疲れ切っていたからかもしれないのですが，和平協定にこぎつけたという。だから，ある意味で，アチェというのは，言うところの「アチェの春」とでも形容できる，これから春になって花が開いていこうというときに，津波復興と一緒になったので，だから，うまくいっていると思うんです。村そのものも自立性を持ってやっている。

さきほど澁谷さんとも話していたのですが，スリランカは全然そんな状態ではない。去年の3月，4月ぐらいのスリランカでは，津波を契機にして反政府軍と政府軍との間で少し歩み寄りも見せてきて，スリランカの人たちも，これを契機に少しずつ紛争もおさまっていくであろうと，そういう気持ちを持っていたのですけれども，実際には全然そんなことにはならなくて，特に9月に入ると，もう大統領選挙そのものに明け暮

れてしまって，復興だとか，開発だとか，そんなふうなものがすべて後回しになってしまった。国を挙げて大統領選挙だけに邁進してしまうという状態に入ってしまったわけです。だから，いかに災害というものが政治とかかわりを持っていくかということは，スリランカとアチェを対比するだけでもよくわかってきたと思います。

これからスリランカはどうなるだろうか，特にLTTE側に対して非常に強硬な態度をとってきた人が大統領になってしまったために，もう復興・開発というのはうまくいかないのではないかという，そういう悲観的なものが流れていますし，もしかすると，北部ではまた紛争が再開するかもしれない。そういう中で，研究者も災害復旧の関係者も再び戦争状態になった場合，そもそも復興・開発が可能なのだろうかという大きな問題に突き当たってしまうのではないかと思います。

2 忘れられる「災害」

それから，もう一つは，スリランカに行って感じたことなんですけれども，実は1年もたたないうちに，スリランカの多くの人たちが既に「津波」を忘れてしまっている。これは，阪神・淡路大震災でも私自身経験しましたけれども，私は阪神間の出身で，今は東京に住んでいるんですけれども，震災の1カ月後に阪神間に行って，東京に帰ってきたら，東京では，それこそ震災なんて全く関係ないような生活が送られている。去年は震災後10周年ということで，いろんな特集をマスコミがやりましたけれども，それもほとんど効果をあらわさない。スリランカでも，去年の津波直後はいろんな人たちが「どうしよう」などと言っていたのが，もう1年もたつと，特に身内が津波に遭わなかったような人たちは，もうほとんど関係のない生活を送っている。「まだNGOが来ているね」みたいな感じで，「NGOに任せておけばいい」と。これも渡辺さんが指摘されたように，スリランカは特に援助大国というか，日本を初め，お金持ちの国々が援助をしてくれているので，そういうものに任せておけばいいだろうというような感じを受けました。ですから，とりたてて災害に遭わなかった人たちというのがこういう災害に対してこれからどのような興味を持っていくかという，どんな興味でもいいんですけれども実際に興味を持ち続けるのは非常に大変だなと思いました。

3 研究者としての被災者とのかかわり方 ―スリランカでの20年間の経験から―

少々私の体験をお話しておきます。

私は，津波の1カ月後に，スリランカに科研のグループに入れていただいて調査に行ったのですけれども，そのときに次のような経験をしました。私はこれまで研究者と

いうことでスリランカの同じ漁村に滞在していて，滞在地では私のことをいつも自然に受け入れてくれました。20年ぐらいずっと同じ漁村に通っています。昔はお金もなく，調査地に行くときは，満員バスに乗って，調査地にたどり着いていました。しかし，就職もし，もう満員バスで調査地に行くこともだんだんなくなってきていた。しかも，去年，津波のときは短期間での調査の必要性と研究のための費用もあったため，ジープで乗りつけて，コロンボからやってきたわけです。村の人たちは，私のことをわかっているので，私に金銭を要求することはないのですが，その村の回りの人たち，近くに住んでいる人たちとか，あるいは村の親戚の人たちなどが，「日本人がやってきているが，お金をくれるように頼んでくれないか。日本から援助でいっぱい入っているではないか。以前から村に通っている彼女にお金を援助してほしいと頼んでほしい」と依頼にきました。村の人たちは，私という人物を理解してくれているので，私と彼らの間に立って苦しんだわけです。「（親戚あるいは友人の）○○さんがお金が欲しいと言っている。それをどうやって私に伝えようか」ということで，私と自分の親戚あるいは隣人との間に立って悩んでしまったのです。

つまり，私が津波直後に行くことによって，新たに村の人たちに悩みをもたらしたのです。私をどのように受けとめて，そして，それを私とこれまで関係なかった人びととどのように結びつけていくかという，この点で私は調査地の人びとに迷惑をかけたわけです。

4　文化人類学者として復旧・復興支援団体とのかかわり方

つまり，それはどういうことかというと，澁谷さんの発表にも出てきましたけれども，我々研究者，特に文化人類学のような研究というのは，特に工学的な知識があるわけでもないし，NGOあるいはODAにもほとんどかかわりを持ってこなかった。むしろそういう機関や組織と関係を持つことは避けてきたようなところもある。研究対象にしたかもしれないけれども，避けてきてしまった。そのような立場でいた者が，自分の調査地が災害を受けた。そういう中で，末長くこれからもずっと調査を続けていく，つまり調査地の人びととこれまでのような関係を持ちながら研究を続けていくに当たって，ラポールの問題も含めて，あるいは調査者の倫理の問題も含めて，これから研究者としてどのようにやっていったらいいかという，新たな問題も突きつけられたと思います。実際に澁谷さんのように，自分がかかわれるNGO活動を共にしていくというやり方ももちろん可能ですし，そういうふうな道しかないと思うんですけれども，そうすると，かかわれなかったNGOとの関係はどうなっていくんだろうとか，そのような問題も起こってくると思います。

5 被災者は被害弱者ばかりではない

もう一つ，渡辺さんに反論するわけではないんですけれども，最後に言いたいことは，こういう被災者というのは，決して災害弱者ばかりとは限らない。これまでの報告の中にも何度も出てきましたように，むしろこういうものを利用して伸びていこうとする人，あるいは，あえて災害弱者とみずから演じることによって，そこから何かチャンスをつかんでいこうとか，そういうたくましさも感じました。特にアチェの報告を聞いて，なぜ仮設住宅がそのまま残っているかという，いろんな事情があるということもわかりました。これはスリランカも同じで，これまで漁民ではなかった人が，「私は漁民である」と言うことによって船をもらっているという例もあります。それを，権力者を欺いているというふうにとるか，あるいは，そこから何か新しいものをこれからつくりあげていこうとする一つのきっかけとしてとらえていくかという問題があると思います。いずれにせよ，この問題は，10年後，20年後，あるいは30年後，あるいは次の世代までずっと長い目で見ていかなければいけないということを，きょう新たに認識しました。

まとまっていませんが，一応これでコメントに返させていただきます。